

脱獄歴六回の記録保持者

五寸釘寅吉の生涯



山谷一郎

この程新潟集治監に於いて囚徒某は、紙を固めて監房内の柱をきり落とし房外まで逃窜したが、折よく通り掛かった警官が取り押さえたと言う。

恐るべき奴だ。事実だとすれば、いや事実だったのである。とすると何と言ったらよいのであろう。

紙で鋸を造り、観世経りで鍵を作り獄舎を破る。いずれにしても明治の中期、今から百年余も前の日本人がこれほどユニークなことを考えだし、しかも実行したと言うことは、褒めるべきことではないかもしれないが、驚くべきことと言えるだろう。

こうして同じ集治監を三度にもおよぶ、前人未踏とも言うべき脱獄を果たした寅吉は、この日から忽然として北海道から姿を消してしまった。

樺戸集治監創設以来、だれもが成しえなかった記録的な脱獄をみごとにやってのけた寅吉が、小樽、函館から本州へ逃避するものとみて、嚴重な張り込みを続けたが、彼はまんまとその裏をかき、留萌港から北陸通いの北前船に乗り込み、富山に上陸そこから気楽な旅を続けて関西の大都会、大阪の人混みの中にまぎれこんでしまった。

彼は全国手配となっていたため、それを逃れる寅吉の足は神戸、広島を経て九州まで延びていたが、結局は熊本で捕まり、今度は空知集治監へ収容された。

「もうすこし話を聞いてくれ。こんどはお前達にとって耳の痛い話になるが、お前達全員とはいわんが、大方のものは今度の網走移動を機に、集団脱走を計画していることも知っている。我々には武器はあるが僅か五人しかいない、お前達は例え連鎖されているとは言え十倍の人数がいるんだから、闘って勝つ自信はまったくないといってもいい。従って今度の移動には我々は命を捨ててかかっている。逃亡する者をわずか五人で追いかけて捕らえることは不可能だ。だがそれだからと言って刑務官として責任上黙って逃がす訳にはいかない。四人や五人はこのサーベルで斬殺することになるかも知れない。その間にお前たちの大半が群衆心理によって、逃げる気の無かったものまで一緒に走り出すだろう。それも仕方のないことである。ただしこの辺りは、どこをみても農家も一軒もない山の中であり、食料を手にすることはできない。しかもこの山中には飢えた狼や、冬眠から目覚めた熊がウヨウヨしているから、殆どの者がその餌食になってしまうだろう。しかも秋ならばいざ知らずこの山中にはお前達の飢えを満たす物は木の実一つない。狼に襲われなかつたとしても一週間も命は持つまい。更に今は集治監が出来たころと違って警察力が、十数倍も増加されているからその手を逃れることは至難なことである。そんな危険なことをするよりも、標茶よりも温暖で土地が肥えて果物も沢山出来るといふ網走へ行こうではないか……」

しかるに事実に戻して、網走町は五千四百余戸、人口三万三千人を有し氣候農業に適し海陸の海産物に富み、山紫水明、本道稀にみる産業観光都市となり、網走刑務所は千七百町歩の土地を有し、その内美田良圃七百町歩は受刑者の手により農耕が営まれ、東洋唯一の農業刑務所と呼称しうる状況にして、收容者も概ねの農牧場に経験を有する短期刑囚多数を占め、出所後は帰農させる趣旨をもって教誨せられつつあるにかかわらず、巷間これらの事情を殆ど認識せざるは、網走刑務所の名によって長年月の間に培養せられたる誤れる先入観念強きによるものとして放置すべきことにあらずと思ひます。

よつて、先に第二十四回議會に、網走刑務所改称の請願をなしたるに、衆議院において願意の通り採択せられたるに、貴族院に於いて大要左の三点により不採用になり。

(注々この請願書は、当時網走商工会議所副会頭をしておられ、戦後北海道副知事であった水牧茂一郎氏の立案されたものと言われている。)

一 刑務所が町の發展を阻止したる事実なし、むしろ網走町の發展は刑務所の存よる所多し。

二 我が国唯一の模範的農園刑務所なるをもつて、釈放者の心境に好影響を与へる。